

『「木」から辿る人類史』を読んで

「蝶の雑記帳 109」

ローランド・エノス著『「木」から辿る人類史』を読んだ。多くのものを受けとったけれども、それを記憶庫に収蔵するゆとりがない。歩みの遅い者が関心を広げようとし能力以上のこともしたりするものだから、限られた数の書物でも消化不良のままになるのである。今回は、教えられたことや感想だけでも記して、また、今考え中の日本古代史に対してヒントになることを書きとめておきたい。

著者は、これまでの歴史家があまり考えたことのない見方から人類史をたどって、多くの新鮮な論点を提出して歴史の理解に抜けていた具体相を追加した、とわたしは思う。この書物を読んで、その鍵となるのが「木」だと言われてみれば、なるほどそうだったかと思うところが数々ある。

人間の歴史を動かすのは、そのときどきの社会で人々が抱えている思想であり、そこから生じる行動である。人々の行動は出来事を起こし、歴史が展開する。もちろん、人々の思想は均質なものではなく大きな広がり多様性を持ち、時代に連れて大小のゆらぎをもって推移してゆく。それに応じて社会が動き、大小の集団や影響力のある個人の活動が出来事を起こし、社会が変化していくのである。しかし、人類史のようなもっと長期的な時間スケールで考えれば、時間をかけ

て変化する歴史のうねりが見えてくる。

その長期的な歴史のうねりの本体は人類の生活である。人々がどのように生活しているかが歴史をつくるのである。そして、生物としての人間の生活を全体的に規定しているのは、自然と人類のつくりだす環境である。人間は、環境という拘束条件のもとで自然に働きかけて生きていく。ホモサピエンスの出現から人類史をたどれば、『「木」から辿る人類史』が示したように、木の上であるいは木から降りて人間が食べ物を得るのに、最も制御しやすい「木」を使うことから始めたことが自然だということになる。手あたりしだいに石のようなものを使うのも当然である。だが、燃えている木に手を出す勇敢な者が出るきっかけがあったとしても、だれもが火を使えるようになるには知能が必要だっただろう。そこまでの長い過程で、人類の脳と神経回路が進化したと考えるほかはない。

R・エノスは、石を有効な道具として使うにも木との組み合わせが欠かせなかったことを示す。そうして、現代人にはありふれた用具と思われる陶器や金属を使うようになっても木は欠かせないのである。第一、土をこねて器をつくり焼き固めるにも、鉱石を溶かして金属をとりだし形づくるのも、火が、したがって火を得るための木がなくてはできないのである。ここの諸段階で、木炭をつくったり金属を鍛錬したりする技術が重要だったことが指摘されている。

だが、そういうことだけに注目するのでは、人類が切り開いてきた文明の全体像を見渡すことができない。木を道具にする、あるいは木で暖をとり高温高熱をつくるだけでなく、木は、衣服をつくり住居やそのほかの建造物を建設するなど、人間の生活のほとんどの場面で不可欠な貢献をしてきたのである。『「木」から辿る人類史』は、それらのことを目配りよく説明していく。

しかし、こういうことを書きとっていきはきりが無い。わたしの印象に残ったことを二三記すことにする。

エノスの見方と方法は、書かれた歴史を理解するのに、くさびのように奥まで波及しほかのこととの関連まで明らかにしたいへん有効である。現代までを通して、歴史を動かす物質的な要素として軽視されがちだった「木」の果たした役割をきわだたせている。その記述のなかで、木そのものの力学的な性質が構造材としての限界を規定していたことも明確にしている。木造建築の大きさと形はそれによって限界づけられていたと指摘されてみると、旅で出会う歴史的な建造物の理解が深まる。石造建築が目立つ地域と木造建築が目立つ地域に分かれるのが、気候風土によるというのは分かりやすい。けれども、石造建築の規模も限界があって木の助けがなければ、ヨーロッパのモニュメント的な大聖堂もあれほどのものにできなかった、と気づかされることになる。

もう一つの木を使う建造物である船についても、構造の進

化をたどるところは興味深い。ヨーロッパの木造船の規模が、木の力学的な性質と海に浮かべたとき船体に働く変形力によって限界づけられていたことを知った。現実実現できたのは、最長で70m前後、千数百トン程度だったそうだ。すでにローマ全盛以前に限界まで到達していたという。実際には建造・進水させるのに巨大なドックも必要なことが忘れられがちだ。日本でも、源実朝が宋へ渡ると言って大船をつくらせたものの、由比ガ浜の砂から抜け出ることができなかったという悲喜劇が起きた。わたしは、興隆するスウェーデンが17世紀に建造した戦艦ヴァーサ号の遺骸を、博物館で見たのを思い出す。大砲の数を欲張りすぎた構造にしたため進水のお披露目で転覆沈没したのを、現代になって引き上げて遺構を組み立てたものだ。こういうことを知ると、東アフリカまで行った明の鄭和の宝船が全長140m余りと言われているのも、単位の読み違いかなにかだろうと思われる。実際、長江下流域で発掘されたドックはそれほど大きくないらしい。

『「木」から辿る人類史』は、人類が木からどれほど恩恵を受けてきたかを余すところなく書くために、今日のわたしたちの生活を基礎づけている産業化（工業化）の時代もふりかえって、木と木の化石の果たした役割を明確にしている。エノスは、産業化の先駆けの時代だった1600年代から説明を始めて、近代の歴史を学んだときにわたしが気づけなかったことを教えてくれる。

大航海時代が始まって100年経った1600年代になると、オランダがポルトガルとスペインを圧倒するようになる。世界をまきこむ本格的な資本主義が、ヨーロッパ北海沿岸域のオランダを中心として始動を始めたことの表われであった。地球上に構成されていくその経済構造のシステムを、ウォーラステインは世界システムと呼ぶ。今日のグローバル世界はその延長上にある。

世界システムの初期段階でオランダが中心となったのは、単純ではなく関連する諸条件によるだろう。そのうちの重要な条件を、エノスは、オランダが泥炭質の低地だったことに注目してあざやかに描き出す。人間の活動に必要なエネルギーを、泥炭を乾かして燃やす熱によって得たのである。オランダは、低地で泥炭を掘り出すのと同時に運河網をつくり、比較的近くにある諸都市に運搬することができる点で、ヨーロッパのほかの諸国よりも有利だった。木よりも容積当りの熱エネルギーの少ない泥炭が、切り出しと運搬の点で立木よりも優位だった。諸都市の生活に必要な燃料も、初期の工業が必要とした熱エネルギーも供給を拡大することができて、オランダの発展を支えたのである。泥炭を掘り出した土地から水を排水すれば、肥沃な粘土質の農地も得られた。こうしてオランダは、農業にも支えられ工業を発展させるのに効率の良い地域だった、というのだ。

オランダは海運業を発展させるのに必要な造船業でも先

進の国となった。発展すると、大木や穀物をバルト海から輸入するようになった。バルト海沿岸諸国もオランダを中心とする世界システムの周縁国として組み込まれたのである。オランダの絶頂期の1600年代末、ロシアのピョートル一世が西ヨーロッパに使節を派遣し、自らも名を隠してアムステルダム造船場で汗を流したというエピソードはよく知られている。

ところが、オランダの発展をイギリス（大小ブリテン島）が追いかける（日本への来航がポルトガル・オランダ・イギリスの順なのは、東アジアへの進出がこの順だったからだ）。オランダの覇権は、ピョートル一世のころにはイギリスに奪われつつあった。泥炭の産出量が減ったことが一因だった。それに対して、イギリスにはヨーロッパで最も多量な石炭層があった。すでに木材資源が大きく減少していたイギリスは、泥炭よりも単位体積当たりの熱量で優れた石炭を使って工業を発展させていく。イングランドは、オランダよりも人口が多くて国土が広すぎないことが有利に働いたのだろう、規模が大きくて効率的な産業国に発展していった。フランスやドイツがヨーロッパ内での領土争いにかまけていたあいだもイギリスは海外で利益を上げることに精を出した。1700年代のイギリスの発展が産業革命へと進んでからの歴史はよく語られており、わたしもある程度頭に入っているから、イギリスが世界システムで覇権を確立し拡大したことについて

では省略しよう。

長かったイギリスの覇権も、1800年代後期に産業を発展させたアメリカ合衆国によって奪われていく（しばしば言い忘れていると思うが、外から人々がやってきてほかの国々よりも一貫して大きな人口増加があり、それらの人々も食べていける大きな国家が形成された）。アメリカといえば、発見された大量の石油のおかげで加速度的に規模の大きな産業国になった姿を思い浮かべてしまうけれども、それ以前の発展が木材資源の活用によると教えられて、見方が変わった。オランダやイギリスの産業の勃興が泥炭や石炭に依存していたのに、アメリカの勃興は木のおかげだというのである。1700年代以来、東部諸州にはしだいにいくつも都市が形成されたが、1800年代後半にも北部にはほとんど手つかずの広大な森林地帯があった。五大湖あたりの森林から大木を切り出して、川に流して木材を得ることが遠くから石炭を運んでくるよりも割安で、経済的に競争できたのだという。

そういわれると、西部劇映画か何かで列車が木を組んでできた橋を渡るのを見たような気がする。ヨーロッパでは鉄橋が一般的だったのに、木材で建設することが経済的に割にあったのだ。蒸気機関車も石炭の代わりに木を燃料にする工夫が行なわれたそうだ。家屋も、イギリスのレンガ造りやフランスの石の家とはちがって、安上がりに木造住宅を建てたのだ。現代でも、竜巻の被害の映像を観れば、木造の家が多い

ことに気づく。情報技術を主体とする現在の大国アメリカが、産業化の初期には木材に依拠していたと気づくのはとても感慨深い。

われわれが目にして今日の世界は、1600年ころからの世界システムが発展・変遷してきた姿である。その世界システムの運転において、エンジン部となって覇権をにぎった三国が交代するのに、動力源となった植物起源の木の化石と木が物質的な要素として強く関係したという見方は、とても印象深い。今では植物質と動物質の両方を起源とする石油や天然ガスに主に依存するようになった。これらのことが、人類史を自然史に結びつけて考えなければならないことを教える。

エノスは、木を中心に人類史をながめるなかで、木材資源の大量消費と資源の枯渇の問題を見落とさない。人類史は自然史に結びついている。だからエノスは人類史をその次元で観ることの重要性を言い忘れない。木を住・食・衣に使うことから、木や石炭や石油を燃やした素材として使って産業を発展させた歴史を見つめれば、その大量消費に限界があることに気づかざるを得ない。炭素を燃やして炭酸ガスで地球を包むことは、必然的に大気と大地を温暖化することである。現在の完全にグローバル化した世界システムは、グローバルに人類の生活・生存を脅かしている。『「木」から辿る人類史』は、人類が快適な今の生活を営む先には、たいへん困難

だが解決しなければならない問題があることを教えているのである。

これでこの書物に触発されてわたしが考えたおおよそのことは書き終えた、と思う。

的が外れるけれども、この書物のなかの記述の一つが、現在のわたしの関心事である日本古代史に関係すると考えるので、それは「巨大古墳の考古学抄」と題して、「蝶の雑記帳 109b」に書きとめる。

2022年2月雨水

海蝶 谷川修

